

2024年4月7日

説教題「嵐の湖に響く言葉」ヨハネによる福音書6章16～21節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは言われた。『わたしだ。恐れることはない。』」(ヨハネ福音書6章20節)

先週のイースター礼拝では、イエス・キリストの十字架と復活の出来事を通して、私たちに手渡されている「希望」について聖書から聴く恵みをいただきましたが、ペンテコステまでの間、ヨハネ福音書が伝える「イエス・キリストの信仰」について、「主イエスを信じるとはどういうことか」について、聴きたいと願っています。

今朝一緒に開いた「嵐の湖の上を歩かれる主イエスを恐れた弟子たち」のエピソードは、三つの福音書ではいずれも「五千人のパンの奇跡」の後に続いて紹介されています。たった五つのパンと二匹の魚で、五千人以上の人々を満腹にされた主イエスの御業を目の当たりにして、弟子たちは感嘆し、人々は「このイエスこそ、イスラエルを救うメシアではないか！」と熱狂しました。しかし、その直後に弟子たちは「嵐の湖の上で恐れ、おののく」のが今朝の場面です。賛美、感謝そして笑顔あふれる場面が、強風に荒れ狂う湖と恐怖におののく場面に一転するのです。いったい、このエピソードは私たちに何を伝えているのでしょうか。

このエピソードが私たちに伝えていること。それは、主イエスが一緒におられない時の弟子たちの信仰が「いかに弱く、薄く、もろいか」ということでしょう。どんなに素晴らしい奇跡を目の当たりにしても、次の瞬間、私たちは「恐れ、戸惑い、叫び始める」。それほどに私たちの信仰は「小さなものだ」ということです。

人は恐れます。身の危険を感じたり、自分の理解を超えるものと出会ったり、あるいは自分には荷が重すぎる仕事を委ねられた時などに、私たちはすぐ恐れ、腰が砕けてしまうのです。主イエスは「岩の上に家を建てなさい」と言われます。「そうだ、十字架の主の上に、しっかりと建てよう！」と思いながら、すぐに揺れ動き、動揺し、ガタガタと慌て始める…。「なんともろい土台の上なのだろう…」と毎日のように反省の繰り返しの自分がいます。

けれども聖書を開くと、みんな「恐れて」います。アブラハムもハガルも、ヤコブもヨシュアも、ギデオンもダビデも、エレミヤもザカリヤも、マリアも羊飼いたちも。そして、主イエスに従った弟子たちも、使徒パウロも。そして、みんな「恐れるな！」と語りかけられています。私たちと比べてずっと「信仰深い」と思われる人たちがみんな、恐れ、動揺し、腰が砕け、腰が引けてしまっている。そういう意味では「恐れること」自体は恥ずかしいことではないのです。私たちはみんな「恐れる」のです。

今朝の箇所では、嵐の湖の中を、水の上を歩いて近づいてくる主イエスのことを弟

子たちは「恐れた」とありますが、その前から嵐の中で思うように舟が進まず、弟子たちの心に不安と恐れが広がっていたことだろうと想像します。ガリラヤ湖を知り尽くしている漁師でさえ漕ぎ悩むのですから相当な嵐だったのでしょう。あの「パンの奇跡」の直後です。弟子たちは「主イエスが一緒に居てくれたなら」と心底思ったはずです。その嵐の湖の上に「わたしだ。恐れることはない」という主イエスの声が響きました。「わたしだ」は「わたしはある」「わたしは、ここにいる」とも訳せる言葉です。あり得ない場所に、主イエスが一緒に居るわけがない場所に、でも主イエスは「共に居てくださいる!」。これが弟子たちが嵐の湖の上で聞いた言葉でした。

「わたしはある」という言葉は、出エジプトの時にモーセが神の呼び名として教えてもらった名前です。神は「わたしはある、という者だ」と教えてくださったのです。「どんなに厳しい状況でも、こんな場所に神さまがいるはずはないということにも、わたしはあなたと共にいる!」という意味です。またヨハネ福音書8章では、主イエスが「わたしが上げられた時にはじめて、あなたたちは『わたしはある』ということを知るだろう」と語られています。「上げられる」とは、主イエスが十字架につけられた時。「どうして、神さまがここまで苦しまなければならないのですか?」という悲しみと苦難の時。しかし、その十字架の主イエスの姿こそ、神さまが「わたしはある、あなたがたと共にいる」ということの確かなしるしなのだと言われたのでした。

先週のイースターでは、ラザロの復活の場面で、姉のマルタがラザロの復活を見る前に主イエスから「わたしは復活であり、命である。わたしを信じるか?」と迫られた箇所を紹介しました。「見て信じる信仰」ではなく「見ないで信じる信仰」は、「空っぽの手の中に、主イエスの約束の言葉を握りしめていく」ことです。その時に一つ、覚えておきたいことがあります。主イエスご自身も、この世の嵐を歩むために祈りを必要としたということです。そもそも「パンの奇跡」の後に、なぜ弟子たちだけで湖に舟を漕ぎだしたのかというと、同じ箇所を描いているマルコとマタイでは、主イエスが弟子たちを「強いて」舟に乗せて、御自分は一人祈るために山に行かれた…とあります。ヨハネは、パンの奇跡に熱狂した人びとが主イエスを王にしようとしているのを知って一人山に退かれた…とあります。共通しているのは「主イエスが一人で祈る時間を必要とされた」ということです。「神の子」である主イエスにして「そこまで」一人で祈る時を必要とされたのです。「まして私たち」はどうなのでしょう。主イエスに比べたら、ほんとうに小さな信仰しか持ち合わせていない私たちが何らかの形で神さまの働きのお手伝いをしたいと思うなら、もっともっと一人で祈る時を必要とするのではないのでしょうか。私たちが歩むこの世の嵐の中で「ここに、あなたと共に、わたしはいる!」と励ましてくださっている方の声を聴き取り、その約束をしっかり握りしめて、主の日からの一週間を歩いていきましょう。